

## 平成 27 年度第 2 回グローバル教育推進委員会議事録

1 日 時 平成 27 年 10 月 20 (金) 9:00～11:30

2 場 所 高知共済会館 (3 階 会議室 飛鳥)

3 出席者

【委員】 葛城崇委員、江原美明委員、長崎政浩委員、石筒覚委員、山本ベバリーアン委員、  
中山雅需委員

【オブザーバー】

高知南中学校・高等学校 校長 (谷岡)、副校長 (廣瀬)

高知西高等学校 校長 (松木)、教諭 (井上)

【県教育委員会事務局】

小中学校課 課長補佐 (今城)

高知県教育センター 所長 (下司)、学校支援部長 (岡本)、チーフ (武市)、  
指導主事 (南、田中、竹本、上田、樫尾)

高等学校課 課長 (藤中)、企画監 (坂本)、課長補佐 (高野)、チーフ (松井)  
指導主事・主査 (阿野田・久保・川田・前野)

4 協議事項

「グローバル人材の育成につながる取組 (探究型学習等) について」

グローバル人材の育成について、大阪大学の取組を山本委員から情報提供をいただいた後、高知西高校の実践報告、協議を行った。

委員：

- ・本県におけるグローバル人材の育成については、昨年度より多くのご意見をいただき、本年度から具体的に取り組んでいるところであるが、情報提供や各校の取組の報告を受けて、ご意見を願いたい。

委員：

- ・高知西高校の海外リサーチ等の活動は外部からの評価が高く、全国的にもサクセス事例になるのではないかと思うが、来年はどのような計画をしているのか。また、海外リサーチ等の相手先をどのように決めているのか。

オブザーバー：

- ・次年度以降も、継続した取組を実施していく。しかし、スキルに課題が残っているので、そこを中心に分析も含め、実施予定である。生徒が、自分たちで考えたモデルプランの作成と発表を行っていく予定である。
- ・相手先については、県内リサーチは、県から情報提供をしてもらい、直接アプローチをかけている。海外リサーチは、高知県内の企業から情報提供をもらい、相手先を探している。ちなみ

に、オーストラリアは、姉妹校を通じてコーディネートしてもらった。香港は県内企業の協力が  
あり、シンガポールは日本の企業を通じて、コンタクトを取ってもらった。

委員：

- ・高知西高校の取組は、大変素晴らしいと思うが、SGHの指定が終わったあとは、どのように継続して  
いくのか。また、その時の課題とは、どのようなものがあるのか。
- ・学校に外国籍の生徒がいた場合、「日本人のアイデンティティ」以外のアイデンティティをどう教  
えるのか。
- ・課題論文の評価やフィードバックをどうしているのか。

オブザーバー：

- ・SGHの取組をとおして、生徒は物怖じしなくなり良い傾向が見られた。今後もこの取組は、ぜひ継  
続していきたい。「なぜ」「どうして」というところまで深められるのは、教養があるからこそで  
きることであり、学力向上につながると思う。探究活動により学力アップも狙っていきたい。  
課題は、海外リサーチ等の費用面である。将来は生徒負担となるため、その対策を考えたい。ま  
た、生徒は、県内企業をあまり知らないなので、県内リサーチは毎年続けたい。
- ・日本人のアイデンティティについては、日本のおもてなしや大和魂、調整力、わび・さびなどを  
中心に考えているが、みんなに日本人になってほしいという意味ではない。
- ・課題論文は、2年生の終わりに書かせる計画である。評価については、ルーブリック評価を思案、  
作成中であるが、作成には難しさを感じている。

オブザーバー：

- ・課題論文については、国際バカロレアのコアのひとつでもある課題論文の扱いもあるので、それ  
をルーブリックに反映させている。
- ・SGHは、国際バカロレアのTOK（知の理論）につながると思う。

事務局：

- ・大学入試（大学側・受け入れ側）が、今後、変わっていくことで、学校での取組が評価される入  
試も増えていく。学校の取組が継続実施できるように、環境整備が大事になってくる。予算面  
では、留学支援について、国の事業を活用しながら取り組んでいく。

委員：

- ・入試等にまだ課題が残っていることは事実である。客観性を保ちながら、基礎学力とそれ以外の  
モチベーション等を見取れる特別入試にも、力を入れていきたい。

委員：

- ・教員の共通理解をどのように図っているのか。
- ・SGHの取組は一定の成果があったということだったが、アンケート結果には、「成果があったかど

うかわからない」と答えた教員が2名いる。これは、どういったことが理由か。

オブザーバー：

- ・SGH の取組は今年が初年度で、1年生のみの実施であることから、2、3年生にしか関わっていない教員とは温度差がある。そこで、SGH 通信を全教職員に配布したり、TV 等のメディアを活用したりして、取組内容を知ってもらう工夫をした。また、校内の各種委員会でも、多くの教員に関わってもらうようにした。また、校内研修として羽根拓也氏（株式会社アクティブラーニング）を招き、「日本人はコンテンツ重視で伝え方に重きをおいていないことが多い」という課題から、「伝える技術」について話をしてもらった。情報提供を全体にすることで、学校文化ができると考えている。
- ・わからないと答えた教員は、まだ実施1年目であるため、途中段階ではわからないということである。

委員：

- ・大きなプロジェクトを進めていくには、一部の人だけで実践するのではなく、みんなで参加して取り組むべきである。

委員：

- ・主体的な学びについては、問題点もある。学校がおぜん立てをしたプロジェクトには、積極的に参加する生徒は多いが、自分で学びを開拓するとなるとそうではなくなる。ここから一步踏み込み、自分で学びを開拓するということに着手する必要がある。今後、自立的な学びをどのようにしていくのか。
- ・ルーブリックは作成が難しい。生徒を育てるための形成的な部分が重要で、ここをこうすればよくなるということ、一人一人にフィードバックをしていくことが、教員に求められる。
- ・英語教育に、多聴、多読というのは必要なことだが、「質」にも着手する必要がある。人として本当に伝えたいこと、本物のコミュニケーション力を育てることが大事である。

委員：

- ・県内リサーチ等、1年生の段階で意識づけをさせることは素晴らしい。「ただ楽しかった」だけではだめだと思うが、訪問したことを学習にどのようにつなげるのか、定期的に意識づけていくことが必要である。「自分が行きたいところに行く」、「一人でやる」のではなく、仲間とテーマを模索していくことで、自分たちが本当に発信したいことが見付き、それが海外への発信につながると思う。
- ・評価の指標については、教員が議論をする場が必要である。ルーブリックは、教員が自分で作ったということが重要であり、そのためには、実践をとおして、「何のために」「生徒をどこまで伸ばすのか」を考えながら作成しなければならない。また、作成すれば終わりではなく、それを活用しながら、どう修正していくのが大事になってくる。

委員：

- ・ 教員だけが SGH を構成していくのではなく、生徒の力を活用してもらいたい。生徒会活動のように、生徒自身が後輩を育てる視点を持ち、継続した取組になることをお願いしたい。

委員：

- ・ 英語学習については、多聴、多読をする時にテーマに沿ったものにしたほうが良い。テーマに沿って、複数書籍を読んだ方がわかりやすい場合もある。プレゼンでよく使うような、フレームがあるとよいのではないか。

委員：

- ・ 授業中に本文理解をするのではなく、以前にも取り入れていたが、和訳を先に渡して、読んだものをディスカッションする等、発想の転換もしてもらいたい。

オブザーバー：

- ・ 2年次の課題研究につなげるには、1年次の現在の語彙力では難しいため、多聴、多読をすすめている。テーマに沿った多読は、1年生ではスキル不足である。しかし、話す方では、テーマに沿って実践しており、ディベートのようなことも取り入れている。
- ・ 初めて実施する取組は、開拓していくことが大変だが、その次からは、目的がズレないように確認しながらすすめていくことが大事だと考えている。ルールが敷かれると、型を踏襲するために活動の裏側にどのような意義があるのか、形骸化しないようにすることが課題である。

委員：

- ・ 多読は必要であるが、ただ文法だけを確認するようなことがないように、本来の「読む」ということは、どういうことなのかを含めて指導していただきたい。

委員：

- ・ 偏ったものではないが、アウトプットさせる時は、筆者の意図を読み取らせるように絞った方が良い。そのためにも、インプットする時に青写真を描いて与え、核心にふれるような発表（アウトプット）ができる授業づくりをすると良い。

オブザーバー：

- ・ 学びの到達目標を明確化させるためにも、先ほどのアドバイスは大変ありがたい。これまでの取組ともリンクさせ、来年のシラバス作成に反映させていきたい。

委員：

- ・ 調査によると、特に書く力や話す力の成績が低い。一方、将来の英語使用イメージが明確な生徒ほど、英語の成績が高い。「自分の言葉で伝えたい」という気持ちが必要である。英語の成績をあげるためには、授業以外でも英語を使う機会を増やすことが大事である。ただし、これは、「塾に

行ったほうが良い」という意味ではない。

委員：

- ・たくさんのご意見をいただき、高知西高校の課題にすべて触れたと思う。

オブザーバー：

- ・これからも実践をとおして、いろいろな課題が出てくると思うが、今日のご意見を参考に英語教育のモデルをつくっていききたい。

## 5 情報提供

「英語教育における国の動向について」

葛城委員から情報提供をいただいた後、質疑応答を行った。

委員：

- ・英語教育に対する生徒の意識について、例えば IB を希望する生徒と希望しない生徒がいるが、この意識の違いによって、将来の道が分かれてくる。この意識の差は、生徒の意思だけでなく、保護者の意識ともリンクしており、今後は、保護者への対応も必要なのではないか。

委員：

- ・新入社員に実施した「海外勤務への希望は」という意識調査では、「NO」の回答が右肩上がりであり、その理由は「自分の語学に自信がない」という結果が出ている。これからの日本の将来を考える視点からも、保護者を含めた改革が必要になってくると思う。

事務局：

- ・英語嫌いの前に、ベースラインがしんどい子どもたちには、どのように対応していけばよいか。

委員：

- ・スポーツが好きな子には、海外スポーツの web サイトを活用する等、興味がある分野から入っていくことも1つの方法だと思う。

委員：

- ・読めない、発音できない、わからないといったことを、どのように解消していくのかがポイントである。また、先ほどあった話のように、保護者への働きかけも必要かもしれない。

事務局：

- ・インフラ面が課題という話があったが、その点で何かあればご意見をいただきたい。

委員：

- ・ALTをもっと活用するべきではないか。英語での会話で褒められると喜びにもつながる。また、英語のサイトをもっと利用したり、良いコンテンツを見つけたりすることも良いのではないか。

委員：

- ・コミュニケーション重視の授業になって、生徒の学習時間が減少したというデータについては、必要以外の予習をすることがなくなったことが考えられる。コミュニケーションアプローチをするための課題が与えられていない。課題の与え方の工夫が必要である。

委員：

- ・ありがとうございました。本日いただいたご意見を踏まえ、今後の取組を進めていきたいと思えます。本日の協議は、以上で終了します。次回につきましても、よろしくお願いいたします。